

ダンスと体操－伊沢エイの動きとダンスのとらえ方

研究報告 田川典子
出 演 東京女子体育大学
ダンス部・新体操部

1. 東京女子体操音楽学校のあゆみと伊沢エイ

明治35年、音楽と体操の密接な相乗作用に着目した高橋忠次郎によって、日本初の女性の体育指導者養成機関として創設された東京女子体操音楽学校（以下音体と称す）は、明治41年高橋の客死というアクシデントによりその学校経営と指導を藤村トヨに委ねられることになる。藤村トヨの実妹であるエイは明治42年に姉のいる音体に入學し翌年卒業。その後、母校に残り音体に着任した坪井玄道の助手として勤務し、ダンスに関する多大な影響を受ける。大正11年坪井没後はダンスの教授を継承している。音体は後に東京女子体育専門学校、東京女子体育短期大学、東京女子体育大学と校種を変えながら現在に至っているが、エイはトヨの没後学長としてその任にあたり、教授としても最後までダンス指導に情熱を注ぐ。昭和40年1月没。

2. 伊沢ダンス形成の過程

① 坪井玄道のダンスへの疑問

坪井玄道を絶対の師と仰ぎ、その人格、指導理念に啓蒙されながらも、実技としてのダンスには徐々に疑問が生じた。エイは当時を回想し、「私には此の少しの上肢運動とステップの変形では物足りなさを覚えるようになった。そこで身体を体操的に動かせる全身的な運動の含まれるダンスを考え、殊に運動会用教材として動きの大きなものを創作してみたくなった。」と記している。そこで生まれた作品が表現的に創作した「麗しき山」で、これがエイの処女作となった。この作品が、坪井の賞讃を得るところとなり、更に「これからどどんやってみよ。」と激励まで受けたことで自信を深めていったようである。

② ドイツ留学

坪井亡き後のダンス指導の重責に苦慮し、子供の成長段階に応じた指導、固くなりつつある生徒の動きや不自然な姿勢の矯正・指導の解決策を模索していたエイは、既にその研究のために渡独していたトヨに呼ばれ昭和3年にドイツに留学、そこでの研修に活路を見出した。その当時のドイツは自然主義が各分野に浸透し、身体文化と関連するものとしては型の束縛からの解放による自由運動が自然運動へと進展していた状況にある。この中で活躍していたカルマイエル、メンゼンディー

ク、ボーデ、ヴィグマン、ドロテヤ、シュミットらに師事したエイは「背中を丸くしたり、力を抜いたり、女子が全裸で体操をする。」など、これまでには思いも及ばなかった運動体験をし、少なからず困惑している。しかしながら後の述懐にみられるようにこの研修の中で「システムに於て各々特徴を持っていたとしてもボーデの自然体操が全部根本になっている事。」を学び、それまで自分が行ってきた体操が「いかに非科学的であったか、科学的に理解しようとしていなかったか」と自らを反省、長年抱きつづけた疑問の空洞を一挙に埋めるべく充実した時間を送った。エイはこの自然体操理念をもとに、ダンスの動きの根幹に自然運動を捉えることを確信した。また、ドロテヤのダンス指導で生徒全員にタンバリンを持たせ、リズム・拍子の理解をさせていること、ヴィグマン・シュレでは「ヴィグマンの指導法は、全員を体操隊形に並べて運動させるのではなく、1人か2人の移動式の基本指導である。」「ダンスは各々個人的な動きに特徴をもつのが当然なので、この指導法でなければ各々の特技を上達させることはむずかしい。」と感服し、自らの指導法確立にむけての新鮮な体験を重ねている。

3. エイのダンス理念

① 帰国後の活躍

昭和4年3月積年の疑問を解消し、自信をもって帰国したエイは早々に創作活動に入り次々にダンス作品を発表する傍ら、姉トヨと共に自然運動の理解を広めようと講習会を通して熱心な指導を展開している。しかし自然運動が当時の日本で容易に受け入れ理解されるとはエイ自身も考えてはおらず、覚悟の上で最初の気おくれを乗り越え、自身をもって実行することを心に誓ったと回想している。また、日本の現状を配慮し、自然運動の大切な部分である、緊張・解緊・弾性・振動に重点を置き柔軟度の意識を喚起することに努力している。

② エイの考えるダンス

エイは、ドイツでのダンス学習に於いてその最も重要なことは基礎指導にありと実感し、その基礎が極められていれば、振り付け・創作は無尽蔵であるとまで言い、それはヴィグマン・シュレでのダンス指導が徹底的な基礎練習であったこと

から、単に教材となる作品の数を習っても何年とは続かないことを看破している。従って、ダンスの指導については、「従来のステップと跳躍を主とした古い殻を破って、身体の動きを素材とする基本運動に重点を置き、其の結果として、動きの美を推進し、創作の糧としてのダンスの教養を与えると共に表現技術の培養に効を奏する。」とのダンス理念を確立する。しかしエイは後年、「この理念は未だ完成に至らない。」と述懐している。

③ 体育舞踊

エイはドイツ留学から帰国後昭和11年、ダンス創作及び自然運動紹介の為の講習会に精力的な活動をする中で執筆した、師範大学講座9巻に、体育舞踊についての所信を発表している。まず、体育舞踊の意義については、「体育効果を第一義に考えること。しかし、体育舞踊の使命は体操に於いて望むことのできない微細なる動き、感情のある動き、リズム的な動きによって、身体各部の修練をし端正優美なる容姿を養い美的情操を陶冶し高尚なる徳性の涵養に資するものである。」と述べ、舞踊の芸術性については「芸術は人をして高尚なる快樂を得せしめ、あくせくたる現実の桎梏を脱離して恍惚忘我の楽土に遊ばしむるにあり。」と他の芸術論を引用しながら、「体育舞踊に於いて、此の理想を実現する事は容易な事ではなく、要するに、体育舞踊の目的を失うことなく基礎の確立と心身の鍛練によって芸術的趣味を養い舞踊の理解と鑑識を養成し目的を誤らないようにすべきである」として、体育の目的から離脱することを戒めている。

4. ダンス指導の実際

自然運動を基盤とした、ダンスの基本運動は必ずリズム太鼓やピアノの伴奏によってフロアの端から端まで少数の隊列をもって次から次へと止ることなく連続し、その連続の中から、力の配分を理解し充分な身のこなしが理解できて行くように指導されていった。その実際についてはデモンストレーションで行う。

5. 本学のダンスの現状と今後の課題

本学では、伊沢エイの存命中はひたすら基本運動と自身のオリジナル作品を中心にその指導がなされた。逝去の後には、伊沢の究極の目的でありながら果し得なかったダンス創作の指導の面を模索すべく、学外の実情にも目を開きその不足を補うことに懸命であった。その結果、根本の基本運動が徹底できずにいることは確かである。

現状の問題点としては

①現代に生きる学生たちは、アップテンポで直線的な動きへの志向性が強く、技術面での動きの片寄りや視野の片寄りは否めない。

②“表現体”という視点からは、体幹に張りがなく姿勢の不均整や動きの柔軟性・巧緻性が欠落しているものが少ない。

③多様化の現代にあって、伊沢の考える「動きの原理」習得と他の諸々の内容とのバランスを限られた時間の中でとることが難しい。

伊沢エイの理念を育てながら、上記問題点の改善にむけて今後も検討を重ねたい。

6. デモンストレーションの内容

——伊沢エイの構成による動きと作品——

〈実演〉

- ① ダンス基本運動
- ② 小鳥と青空 (1954)
- ③ 水藻はゆらぐ (1935)

*④ 昭和33・34年度団体徒手体操規定種目

〈VTR〉

- *① ワルター女史によるドイツ体操
- ② 青嵐 (1931)
- ③ 路傍のバラ (1931)
- ④ みてござる (1950)
- ⑤ ベコの子ウシの子 (1950)
- ⑥ しかられて (1950)
- ⑦ アルプスの夕映え (1950)
- ⑧ 泉のほとり (1954)

*は参考資料として

〈スライド資料〉

高橋忠次郎、藤村トヨ、坪井玄道、荒木直範、伊沢エイ、メンゼンディーク、ボーデ、ウィグマン他

——現在の学生たちによる創作作品——

- ① ダンス部4年生作品「手」
- ② 新体操競技部
(個人) 伊奈あゆみ、大塚裕子、秋山エリカ
(団体) 全日本I.C優勝チーム

*1987年秋季第24回舞踊学会
『舞踊学』第11-1より転載